

研究ノート

ハリカルナソスのマウソレイオンの復元

長 田 年 弘

西洋古代の七不思議の一つに数えられた、カリア (Karia) の王マウソロス (Mausolos) の墓、ハリカルナソス (Halikarnassos) のマウソレイオン (Mausoleion) は、その

正確な復元が史家の関心を呼び、前世紀以来多くの研究が重ねられてきた。ところが一九八〇年代に入ってから再発掘の成果をもとに、信頼度の高い重要な復元案が提出され、マウソレイオンの研究史に新たな展開を見せている。新しい研究は、マウソレイオン発掘総監督クリスティアン・イエッペセン (Kristian Jeppesen) と、大英博物館所蔵のマウソレイオン彫刻群を調査しカタログ・レゾネを刊行したジョフリー・ウェイウェル (Geoffrey B. Waywell) を中心に進められている。両研究者は互いの研究結果を援用しつつ、それぞれ別個の復元案を公表した。本論ではこうした新しい発掘成果とマ

ウソレイオン復元にいたる実証の手続きをできるだけ具体的に検討し、両復元案がどの程度の客観性に依拠するものであるかを明らかにしたい。

マウソロスは紀元前三七七年ベルシア帝国カリア州総督の地位を父から受け継ぎ、ハリカルナソスに遷都した。マウソレイオンは都市の中央のアゴラに隣接する場所に建立されたので、マウソロス王自身が新首都建設に際してこの位置を選んだとされる¹。王は前三五三年に没しており、墓の建造開始はこの年以降と思われる。二年後の前三五一年王妃アルテミシアも没したが、伝承によれば墓の制作に携わった芸術家達は、王妃の死後も制作を続行したという。「彼らはすでにそれが、彼ら自身の栄光と彼らの職業の記念物になるだろうという考えをもったからだ」と、プリニウス (Plinius) はその

理由を伝えている。² 墓の建築は従って、前三四〇年代に終えられたと推定される。

マウソレイオンは最初一八五六年から五八年にかけてサー・チャールズ・ニュートン (Sir Charles Newton) によって発掘され、その後約百年を経て、一九六六年から七六年にかけてイェッペセンを中心とするデンマーク隊によって再発掘された。⁴ 近代的方法を用いたこの再発掘によって、従来の多かれ少なかれ想像的な復元案に替わる、より客観的な復元が可能となった。発掘成果の詳細はイェッペセンによれば、発掘報告書の第四巻以降にまとめられる予定である。

復元の手がかりは大まかに二種類に分けられる。すなわち

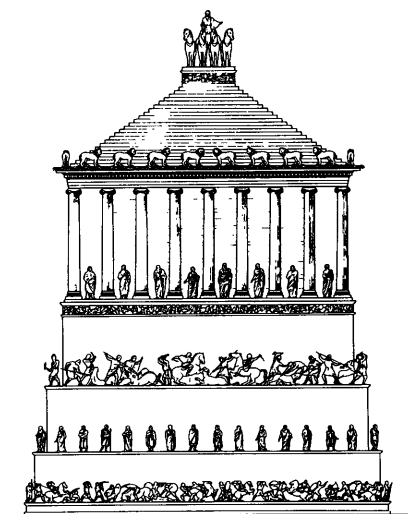


図1 ハリカルナソスのマウソレイオンの
Waywellによる復元 東正面
Susan Bird画
Waywell (1989) Fig. 11

文献による伝承と実際の発掘物とである。マウソレイオンに関する数種の文献伝承のうち、最も重要なものはプリニウスによる記述である。⁵ 彼によればマウソレイオンは大まかに次の様な外観を呈していた。プランは東西にやや長い四角形で、高い台座状の下部構造と周柱式の神殿型建築の上部構造からなり、ピラミッド状の屋根が架構されていた。ピラミッドの頂点にはさらに、四頭立て馬車の彫刻が据えられていた。図1は一九八七年のウプサラにおける国際学会で発表されたウェイウエルによる復元案、図2、3は一九九二年のドイツ考古学年報に発表されたイェッペセンによる復元案である。⁷

以下にこの復元に至る実証の手続きを検討したい。

イェッペセンによる新しい発掘調査の最も重要な成果となったのは、おそらくボドゥルム (Bodrum) Ⅱハリカルナソスの現在名) の城塞建築における一個のアーキトリヴ部材の発見であったと思われる(図4)。マウソレイオンの建築部材の一部は中世の城塞建築に再利用されており、これらは城壁中に埋め込まれた状態で発見された。この部材は好運にも、元の完全な長さを測定しうる良好な保存状態で発見された。

図8の且に相当する、天井格間を支えるクロス・ビームに挟まれた部材である。この発見は後に説明するように、マウソレイオンの上部構造と下部構造の形状を推定する上で決定的な役割を果たしている。部材の長さは二、三六五メートルで、

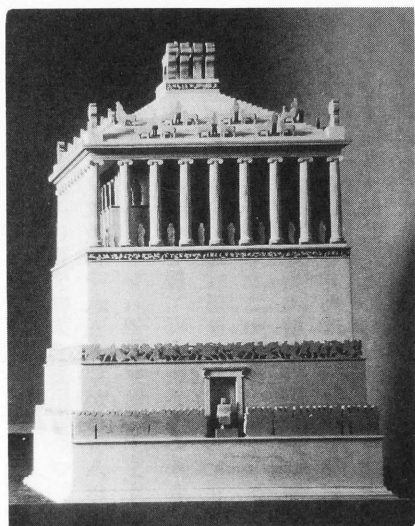


図3 図2に同じ。
Jeppesen (1992) Pl. 30-2

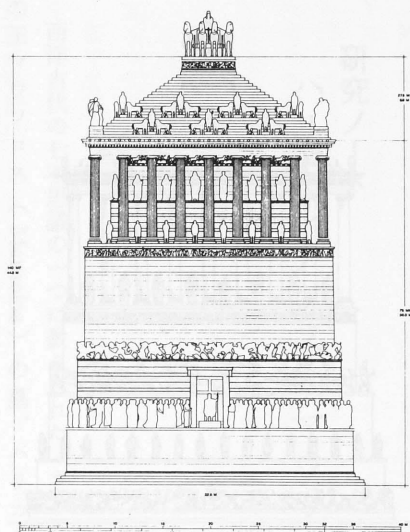


図2 ハリカルナソスのマウソレイオンの
Jeppesenによる復元 東正面
Jeppesen (1992) Pl. 27-2

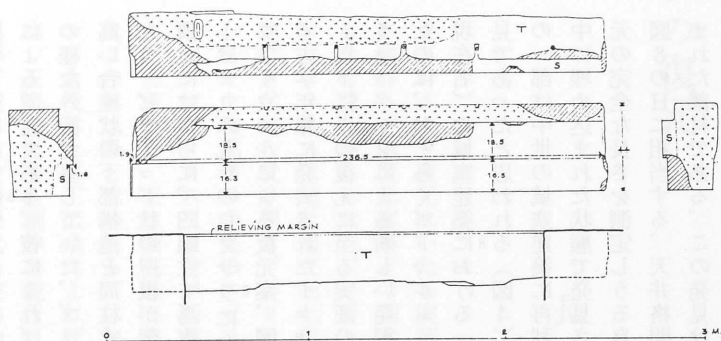


図4 ボドルムの城塞建築で発見されたアーキトレヴ・ブロック
Jeppesen - Zahle (1975) Fig. 6

上部構造列柱の柱間距離の算出を可能にする。こうして柱心から柱心までの柱間はほぼ三メートルであったことが判明した。一方文献伝承と発掘上の証拠から列柱の縦横の数はほぼ確実に推定出来る。なぜなら列柱の総数が伝承されており（三六柱）、一方建造物のプランの縦横（長辺・短辺）の比率が礎石発掘によって明らかにされている（約5対4）からである。すなわち列柱は九×一柱

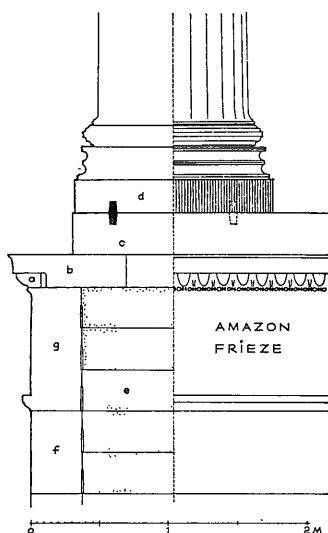


図5 下部構造上縁の復元
Jeppesen—Zahle (1975) Fig. 5

であったと推定される。こうして柱間距離の判明によって上部構造の床面平面図は、寸法を含めてかなり正確に復元される。

列柱はイオニア式オーダー。柱礎はいわゆる小アジア型に属し、トルスと二つのトロクロイから成り、その下に台石 (Plinth) が敷かれていた (図5)。柱身には二四条の溝彫り (フルーティング) が施されていた。柱の高さは不明。図6はマウソレイオンの柱頭、図7に比較例としてブリエネのアテナ神殿の柱頭を掲げる。マウソレイオン柱頭の様式には、列柱全体が非常に高い位置に配されたことと関連する、いくつかの特徴が指摘されている。すなわちエキノスの卵鑲紋の上部が手前に強く張り出していること、又エキノスの上部の、

二つの渦巻きを連結する帯状の部分が幅広いこと、さらにアバクスに通常の卵鑲紋でなくレスボス風キュマティオン¹⁰ (ハートと鑲が交替する文様) が用いられていることである。これらは下方からの視点を強く意識して生み出された意匠と思われる。

イエッペセンによれば軒廻りとピラミッド型の屋根は完全に復元することが可能となった (図8)¹¹。詳細な寸法はまだ公けにされていないが、エピステルは三つのファスキアと歯飾り、コルニスから成っていた。軒廻りの上部はさらに、植物紋 (蓮とバルメットの連続紋) を浮彫りしたシーマで飾られていた。シーマには獅子の頭部を模した排水溝が取り付けられていた (図9)¹²。

次に下部構造を見る。下部構造の先端部分もイエッペセンによれば完全に復元しうるという (図5)¹³。上からコルニス、卵鑲紋と連珠紋とが付せられていた。この二つの装飾帯は、下方のアマゾノマキアを主題とするフリーズ浮彫りの上縁をなしている。

下部構造全体の形についてイエッペセンとウエイウエルは共に、彫像群を配する為の三つの段のある、階段状の形状を推定している。この形は次の様な三つの手がかりを総合することによって推定された。

まず、下部構造の上面 (上部構造の床面) はすでに述べた

ように、柱間距離の解明によってその寸法が算出可能である（約二六×三二メートル）。一方発掘による礎石の調査（図10）から下部構造の底面の寸法が得られる（約三二×三八メートル）。従って下部構造は縦横共に、下辺が上辺より六メートルずつ長かったことがわかる。¹⁴

一方第二の手がかりとしてイエッペセンが発見した、青色石灰岩を材質とする複数の断片が問題となる（図11）。断片は上縁にコルニスが刻まれているが、同時に彫像の台石をはめこむための窪みも備えている。イエッペセンによればこの青色石灰岩の材質は下部構造の化粧貼りに用いられたものと

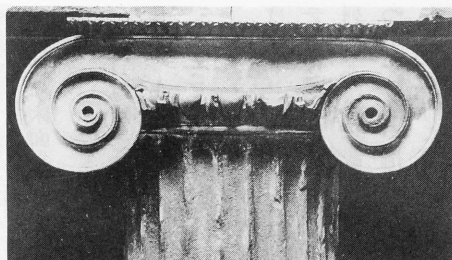


図6 マウソレイオンの柱頭
Drerup (1954) Fig. 6

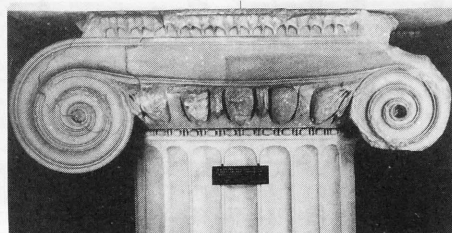


図7 ブリエネ出土の柱頭
Drerup (1954) Fig. 1

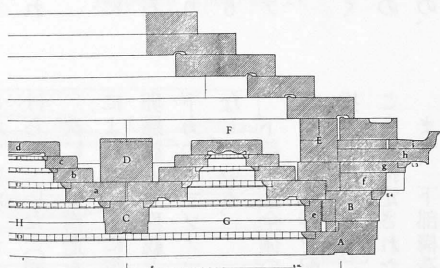


図8 エンタブラチュアの復元
Jeppesen — Zahle (1975) Ill. 7

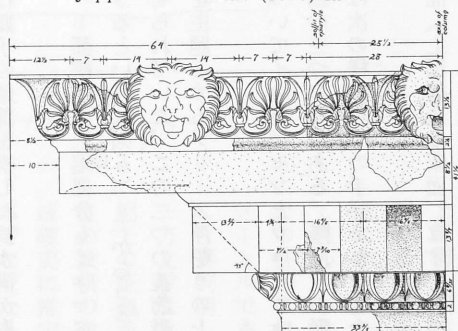


図9 シーマ及びコルニスの復元
Dinsmoor (1908) Fig. 2

いう。¹⁵

出土した彫像群が別の角度から三番目の手がかりを与えてくれる。ウエイウエルは前世紀の発掘によって大英博物館にもたらされたハリカルナソス出土の人物像群を調査し、三つのカテゴリーに分類した。すなわち colossal statue (巨像) と名付けられたクラス、heroic statue と名付けられた等身大より大きめのクラス、そして等身大のクラスである。ウエイウエルによれば第一の巨像のクラスは上部構造の列柱の間に、柱間に一体ずつ据えられていた可能性が高いという。しかし大量の作品が発掘された残る二種の彫像群は、建物のどこか

他の場所に設置を想定すべきだという。¹⁶ こうして現存する彫像群（第三の手がかり）は先に述べた、彫像台石用の窪みを備えた石灰岩断片（第二の手がかり）と関連づけられ、両者の帰属場所がさまざまな形状の判明している下部構造（第一の手がかり）のいずれかの位置にもとめられた。結論として復

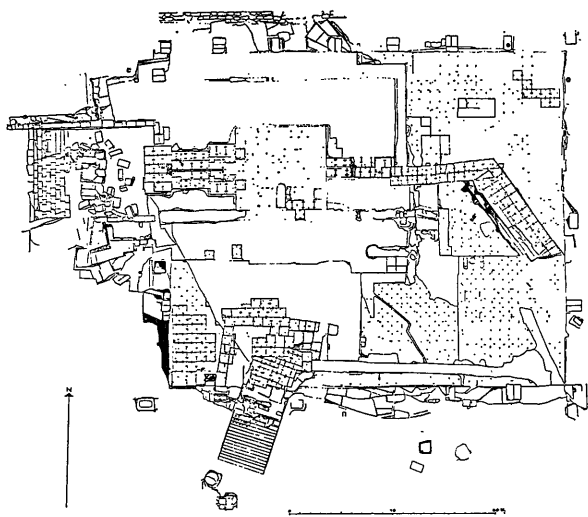


図10 マウソレイオン発掘現場（1970/72現状）
Jeppesen - Zahle (1975) Ill. 2

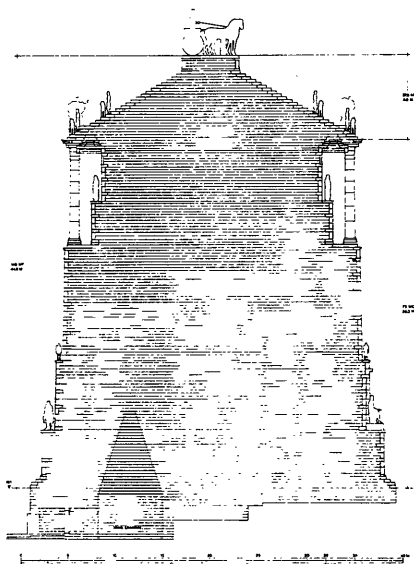


図12 マウソレイオン内部。Jeppesenによる復元 南面より見た断面図
Jeppesen (1992) Fig. 29-1

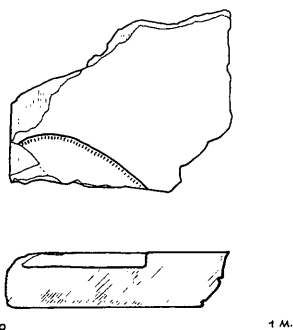


図11 彫像台石跡の残るコルニス断片 Jeppesen - Zahle (1975) Ill. 4

元図に見られる様に、段のある下部構造の形が復元されるにいたったのである。ただし復元図上の三つの段の位置（高さ）は仮定的なものにすぎない。また先述の青色石灰岩の化粧貼りが下部構造のど

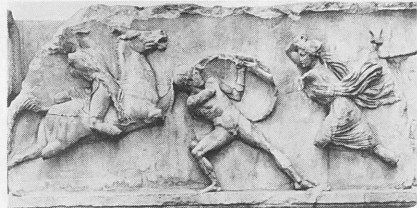


図13 アマゾノマキア・フリーズ
No. 210 — 208 B. Ashmole (1972)
Fig. 191

の部分に用いられていたのかは解明されていない。イエッペセンはこの青色の壁面を下部構造の二段目に、ウエイウエルは最下段に想定している。

次に内部構造について（図12¹⁷）。イエッペセンによる発掘はマウソレイオン墓室の正確な位置を明らかにした（図10）。墓室は建築物

の中央やや西北に配され、西正面と短い廊下によって結ばれていた。ただしこの通路は王の埋葬後に石材によって遮断された。墓室は六・二×六・八メートル、天井は巨大な荷重を受け止めるためにアーチ構造を採用していたと推定される。ヴォールトに相当する部材が発見されなかったため、イエッペセンはミューケナイ時代以来の持送りアーチが用いられたのではないかと考える。¹⁸

次に彫刻について。マウソレイオン発掘によって丸彫と浮彫彫刻の二種が出土した。浮彫は四種に分類され、これらの設置場所についてはイエッペセン説、ウエイウエル説共に一致している。すなわちアマゾノマキア・フリーズは下部構造

の上縁、戦車競走を主題とするフリーズは上部構造内室の外壁上端、ケンタウロマキア・フリーズはピラミッド上の馬車の台座側面、格闘浮彫は上部構造の周柱の支える天井に、それぞれ復元されている。これらの浮彫の中ではアマゾノマキア・フリーズが最も保存状態が良い（図13）。プリニウスはマウソレイオン東面をスコパスが、北面をブリュアクシスが、南面をティモテオスが、西面をレオカレスが彫刻したと伝えており、アマゾノマキア・フリーズの現存スラブを様式によって四つに分類するさまざまな仮説が提出された。²¹

丸彫像に属するものとして、既にふれた人物像、馬車の彫刻の他に多くの獅子像が出土している。これらは、屋根部材に台石の跡が確認されるため、アクロテリアであったとされる。イエッペセンによって総数五六と推定される獅子像は、右向きと左向きの二種が出土している。図1、2、3に見るように、両復元案の配列の仕方には大きな相違がみられる。イエッペセンはこれらの獅子像の他に、アクロテリア四隅に、アポロン、アルテミス、ニオベ、ニオビーデを主題とする彫像群（二×四体ないし三×四体）を想定している。²³

大英博物館所蔵の丸彫人物像がウエイウエルによって調査分類されたことについては既にふれた。²⁴ colossal statueは高さ二・七〇メートルから三メートル、主題によりさらに、王族の肖像彫刻と、犠牲・狩猟の各場面を描くものの二種に分

かれる。よく知られたいわゆる『マウソロス』と『アルテミシア』像はこの第一の肖像彫刻群に属するものとされる。²⁵ 設置場所についてウェイウエルは肖像群を上部構造の列柱間に、犠牲・狩猟場面を下部構造の下から三段目の段上に復元する。ウェイウエルはさらに、高さ二・四〇メートルの heroic statue と呼ばれる彫像群を下から二段目に推定している。これらの像は復元では七二体と想定され、マウソロス王家の先祖を現す肖像彫刻と解釈されている。下部構造の最下段にウェイウエルは、残る等身大の像を復元している。これらの彫像群は騎馬及び歩兵のギリシア人とペルシア人の戦いを表していた。

イエッペセンの復元案はウェイウエルのものと、彫像群の配置場所がかなり異なっている。ウェイウエルがペルシア戦争の彫刻群を配した最下段に関して、イエッペセンは彫像の設置そのものを否定する。墓域を囲む塀によって覆われ見づらかったことが主な理由として挙げられている（図3²⁷）。イエッペセンはペルシア戦争を表す彫像群を下から三段目の段上に、heroic statue を柱間と屋根上に復元する。彼はさらに上部構造の内室外壁に関して、図2、3に見られるような段のある形状を推定している。²⁸ この外壁下段には、下部構造にも用いられている青色石灰岩が、上段には通常の白大理石が推定されている。そしてこの列柱内側壁面上段に colossai

statue が帰せられている。イエッペセンによれば、上部構造に用いられた青色化粧貼りは正面が垂直であるのに対し、下部構造に用いられた化粧貼りは下部が手前に張り出している（台形の下部構造に合わせて正面が斜面をなしている）ため、出土した青色石灰岩がどの位置にあったかはおよそ識別しうるという。

下から二段目の段上の彫刻に関してイエッペセンは、東面は謁見の場面を、西面は狩猟の場面を、南北面は犠牲行列の場面を表していたものと考える。²⁹ 建築物東側で発見された、左手に杖を持つ高さ三メートルの座像を、イエッペセンは東面扉口の前に復元する。マウソロスその人または王家の先祖の像とされ、この人物を中心として謁見の場面が構成されていたと想定する。

屋根のピラミッド頂上に据えられた戦車上の彫像に関しては、イエッペセン、ウェイウエル共に、御者一体またはマウソロス王とアルテミシア王妃の二体のいずれかが配されていたとする。ちなみにイエッペセンによれば、マウソレイオンには総計四一〇ないし三七五体の人物ないし動物像が配されていたと推定される。³⁰

最後にマウソレイオンの建築史上の位置づけについてまとめておきたい。ハリカルナソスのマウソレイオンはリュキア地方の墳墓モニュメントの伝統に位置づけるべきであろう。

この地方の石棺は高い台座上に据えられるのが常であった。また浮彫を有する台座状の下部構造、イオニア式列柱間に配された彫刻群といった諸特徴は、すでにクサントスのネレイド・モニュメントに先行例が見出される。マウンレイオンの場合ピラミッド型の屋根の用いられた点が独特である。マウンレイオンのもう一つの特徴は、言うまでもなくその巨大な寸法である。イェッペンによれば下部構造の下から三段目の彫刻は、バルテノン神殿破風彫刻の高さに等しい位置にあるという。³²建造物全体の巨大さは驚くべきもので、古代の人々が七不思議の一つに数えあげたのも故なしとしない。

註

以下の註において次の文献略号を用いる。

- Jeppesen (1976) = K. Jeppesen, Neue Ergebnisse zur Wiederherstellung des Maussoleions von Halikarnassos, Mitteilungen des deutschen archaologischen Instituts, Istanbul Abteilung, Vol. 26, 1976, pp. 63ff.
- Jeppesen (1989) = K. Jeppesen, What did the Maussoleion look like? Architecture and Society in Hecatomnid Caria — Proceedings of the Uppsala Symposium 1987. Ed. by T. Linders — P. Hellstroem (Uppsala 1989)

pp. 15ff.

- Jeppesen (1992) = K. Jeppesen, TOT OPERUM OPUS, Jahrbuch des deutschen archaologischen Instituts, Vol. 107, 1992, pp. 59ff.

- Waywell (1978) = G. B. Waywell, The Free — Standing Sculptures of the Mausoleum at Halikarnassus in the British Museum (London 1978)

- Waywell (1989) = G. B. Waywell, Further thoughts on the placing and interpretation of the freestanding sculptures from the Mausoleum, Architecture and Society in Hecatomnid Caria — Proceedings of the Uppsala Symposium 1987. Ed. by T. Linders — P. Hellstroem (Uppsala 1989) pp. 23ff.

- ¹ P. Wolters — J. Sieveking, Der Amazonenfries des Maussoleums, Jahrbuch des deutschen archaologischen Instituts, Vol. 24, 1909, pp. 171ff.; A. Stewart, Greek Sculpture (London 1990) p. 180.

- ² Plinius, Naturalis Historia 36, 30 — 31.

- ³ C. T. Newton, A History of Discovery at Halicarnassus (London, 1862)

- 前掲の文献及び G. B. Waywell (1978) pp. 1ff.; H. Riemann, Pauly's Realencyclopaedie der classischen Altertums-

wissenschaft, Vol. 47 (Stuttgart 1963) s. v. Pytheos, cols. 381ff. ㊦㊧⁴

- 4 K. Jeppesen et al., The Maussolleion at Halikarnassos. Reports of the Danish Archaeological Expedition to Bodrum (Jutland Archaeological Society Publications XV) Vol. 1: The Sacrificial Deposit (Copenhagen 1981); K. Jeppesen et al., The Maussolleion at Halikarnassos. Reports of the Danish Archaeological Expedition to Bodrum (Jutland Archaeological Society Publications XV) Vol. 2: The Written Sources and Their Archaeological Background (Copenhagen 1986); P. Pedersen, The Maussolleion at Halikarnassos. Reports of the Danish Archaeological Expedition to Bodrum (Jutland Archaeological Society Publications XV) Vol. 3: The Maussolleion Terrace and Accessory Structures (Copenhagen 1991)

- 5 Plinius, *Naturalis Historia* 36, 30 – 31: スコパスの同時代人であり競争者であったのはブリュマクシス、ティモテウス、そしてレオカレスであり、われわれがこれらの人々をスコパスとともに論じなければならないのは、彼らがスコパスとともにマウソレウムの彫刻を制作したからである。マウソレウムはアルテミシアが、カリアの太守で一〇七オリンピア紀(前三五二—三四九年)の第二年に死んだ夫マウソルスのために築造した墳墓である。これらの芸術家たちは、主として世界の七不思議の一つである建物をつくった。その北と南の側は六三フィートあるが、正面の長さはそうはなかった。それで正面と側の全長は四四〇フィートであった。その建物の高さは二五キュービットで、それは三六本の円柱

で囲まれていた。それを囲んでいる柱廊のギリシャ名は「プテロン(翼)」である。東側はスコパスが、北側はブリュマクシスが、南側はティモテウスが、そして西側はレオカレスが彫刻した。そして彼らがその制作を終らぬうちに女王が死んだ。しかし彼らはその制作を放棄することを拒んだ。というのは、彼らはすでにそれが、彼ら自身の栄光と彼らの職業の記念物になるだろうという考えをもっていたからだ。そして今日でも彼らはその技術において、互いに張り合っていると考えられている。彼らに第五の芸術家加わった。というのは柱廊の上に下部構造物の二倍の高さのブラミッドがのっていて、二四の階段が次第に狭くなっていてその頂点に達している。その先端に大理石でつくった四頭引き戦車があって、これはピュテイスの作であった。この戦車を加えたことで全制作が仕上がったので、それによって高さが一四〇フィートになった。(中野定雄他記)

プリニウスのこの箇所は写本によってラテン語の字句に異同があり、解釈にも問題が多く、マウソレイオン研究に困難をもたらしている。詳しくは Jeppesen (1976) pp. 70ff. を参照。イェッペセンは数種類あるローマ尺(pedes)の中で、プリニウスの記述に用いられているのは三二センチメートルであったと見做している。

- 6 Waywell (1978) pp. 54ff (1989) Fig. 11 に拠る。
7 Jeppesen (1976) pp. 47ff.; (1992) pp. 59ff.
8 K. Jeppesen – J. Zahle, Investigations on the site of the Mausoleum, *American Journal of Archaeology*, Vol. 79, 1975, III.

6.

- 9 Riemann, *ibid.* p. 416.
- 10 *ibid.* 416ff. ; H. Driep, Pytheos und Satyros, *Jahrbuch des deutschen archaologischen Instituts*, Vol. 69, 1954, 1ff.
- 11 Jeppesen — Zahle, *ibid.* p. 76, Ill. 7.
- 12 W. B. Dinsmoor, The Mausoleum at Halicarnassus, *American Journal of Archaeology*, Vol. 12, 1908, Fig. 2.
- 13 Jeppesen — Zahle, *ibid.* 76, Ill. 5.
- 14 Waywell (1978) p. 55
- 15 Jeppesen — Zahle, *ibid.* pp. 75f. Ill. 4.
- 16 Waywell (1978) pp. 56ff. ; Jeppesen (1976) pp. 94ff.
- 17 Jeppesen (1992) pp. 63ff.
- 18 *ibid.*
- 19 Waywell (1978) pp. 56ff.
- 20 ノーイニ圖ヲ大ニ述ビRiemann, *ibid.* pp. 422ff. ヲ説ク。圖ニニ
ニケルナルニ述ビタルノニキル・ノローニ (トリチヤ
ニナ・ニ・ニ・ニ・ニ No. 210 — 208) ' 図ニ述ビ B. Ashmole,
Architecture and Sculpture in classical Greece (London 1972)
Fig. 191 ニ説ク。
- 21 眠世ナリト被田ナリトニ經國ニ B. F. Cook, The Sculptors of
the Mausoleum friezes, Architecture and Society in Hecatomnid
Caria — Proceedings of the Uppsala Symposium 1987. Ed. by
T. Linders — P. Hellstroem (Uppsala 1989) pp. 31ff. ニナニ
ナニナニナニ
- 22 Waywell (1978) pp. 30ff. Figs. 5f. ; Jeppesen (1992) pp.
82, 86

- 23 Jeppesen (1992) pp. 81f.
- 24 Waywell (1978) pp. 40ff.
- 25 Waywell *ibid.* p. 40 No. 3f.
- 26 Jeppesen (1992) p. 83.
- 27 *ibid.* pp. 83ff.
- 28 *ibid.* p. 93.
- 29 *ibid.* pp. 95f.
- 30 *ibid.* p. 95.
- 31 Riemann, *ibid.* cols. 454ff. ナニニナニナニ
- 32 Jeppesen (1976) p. 95.